

青北進路通信

第4号

1学年 第1回進路志望調査結果（7月実施）

	今回(令和2年7月)		前回(元年度生)	
	人数	(%)	人数	(%)
国立大	60人	(30.0%)	61人	(30.5%)
公立大	41人	(20.5%)	40人	(20.0%)
私立大	34人	(17.0%)	45人	(22.5%)
国公立短大	1人	(0.5%)	1人	(0.5%)
私立短大	3人	(1.5%)	6人	(3.0%)
専修学校等	19人	(9.5%)	15人	(7.5%)
就職	39人	(19.5%)	31人	(15.5%)
未定	3人	(1.5%)	1人	(0.5%)
合計	200人		200人	

昨年度の1学年(現2年生)と比較すると、ほぼ同じような志望状況になっており、全体の約半数の生徒が国公立大学を志望しています。その内訳は、弘前大学が28名、青森県立保健大学が23名、青森公立大学が12名となっており、青森県内の国公立大学を志望する生徒が多くを占めています。

「高校卒業後の進路はまだまだ先だから」と考える1年生も多いと思いますが、普通科の生徒は2学期になると、文型・理型を選択しなければなりません。また、大学の「総合型選抜」や「学校推薦型選抜」の募集枠が拡大していることから、早期に志望校を決定して、学校外で行われる体験や講演会に参加することが重要です。1年次の現段階から自身の進路について真剣に向き合い、夏休みを利用して保護者と相談をしながら、夏休みに行われる三者面談に臨むようにしましょう。就職に目を向けると、就職希望者39名のうち、公務員希望者が30名となっており、そのうち11名がスポーツ科学科の生徒となっています。

どの進路を選択するにせよ、1年生のこの時期に大切なことは、授業や家庭学習にしっかり取り組むことです。1学期の学習や生活を振り返り、反省点を改善して、有意義な夏休みにしましょう。

3学年進路講演会

6月30日(火)に3年生の進学希望者に対して、横田和典氏(栄美通信)を招き、「面接対策講座 ～効果的な自己PR～」と題して進路講演会を実施しました。本格化する入試に向けて、総合型・学校推薦型選抜を見据えて、生徒は真剣な表情で講演会を聴講していました。

講演会後半には、1組の伊藤君、2組の秋元さん、3組の張間さんの3名が壇上上がり、模擬面接を行いました。進学希望者にとって、大きな刺激になった講演会だったと思います。講演会で学んだことを活かして、入試に向けていい準備をしましょう。



模擬面接も行いました

求人票の見方と今後の求人動向



6月30日(火)に3年生の就職希望者を対象に、田辺靖二氏(ハローワーク青森)を招いて、求人票の見方や今後の求人動向について講演していただきました。新型コロナウイルスの影響で、就職試験の開始時期が例年よりも1ヶ月遅くなりました。準備期間が伸びたことをポジティブに捉えて、履歴書の内容をさらに良いものにし、夏休みを利用して筆記試験・面接の練習に数多く取り組みましょう。



進路コラム

紳士

数ヶ月前のことですが、フランスの哲学者アルベール・カミュ(1913-1960)著『ペスト』が、青森県内の書店で月間売上ランキング1位になりました。新型コロナウイルスの感染拡大によって、感染症に対する関心が高まったからでしょう。

ニュースで報道されている通り、再び新型コロナウイルスの感染者数が増加してきました。進路通信第2号のコラムでも述べましたが、この感染症は一人一人の努力によって防ぐことが可能です。専門家は感染症の予防法を、実にシンプルに述べています。

「手洗いをする。換気をする。他人と距離をとる。マスクをする。3つの密を避ける。」これくらいです。

簡単そうですが、感染が拡大しているということは、それができない人がいるということです。

スペインの哲学者ホセ・オルテガ・イ・ガセット(1883-1955)は「大衆」について次のように述べています。

『いま分析している人間は(…中略…)ありのままに満足しているのだ。べつにうぬぼれるわけでもなく、天真爛漫に、この世でもっとも当然のこととして、自分のうちにあるもの、つまり、意見、欲望、好み、趣味などを肯定し、よいとみなす傾向を持っている。大衆の人間は、その性格通りに、(…中略…)自分を自己の生の主人であると感じている。』

『今日の平均人は、世界で起こること、起こるに違いないことに関して、ずっと断定的な思想をもっている。このことから、聞くという習慣を失ってしまった。もし必要なものをすべて自分がもっているなら、聞いてなにになるのだ?』

つまり、「大衆」は現状に満足し、自分のことを完全であると思い込み、自己の中に安住している、とオルテガは述べています。

「大衆社会」とは、このようなふるまいの結果、個人が原子化・集団が島宇宙化した状態です。

この傾向をオルテガは「野蛮」と呼びました。

「私は正しい」。大衆社会の傾向は、この一言に集約されます。マスクを着用しない人の理論はきつとこんな感じです。

「新型コロナウイルスにはきつとかからない。青森県内の感染者数はまだまだ少ないし、周囲にもそんな人はいない。かかっても大丈夫。だって、致死率もそんなに高くないし。だから、マスクなんてする必要ない。」

こんな感じじゃないですか?しかし、そう考えているあなたは、オルテガの言葉を借りれば「野蛮」と言わざるを得ない。

専門家はそんなこと、一言も言っていないから。

なぜ、専門家の意見を聞かないのですか?

オルテガは大衆の対極に「エリート」を対置しました。大衆社会の究極の言葉を逆にした人のことです。

つまり、エリートとは「私は正しい?」と問い続ける人。常に自分の正しさを疑う人のことです。

やがてその問いは、「私は、私が存在することによって、誰かに迷惑をかけているかもしれない。」という問いに辿り着くはずで

このような問いを自分自身に問い続けることを、きつと「道徳的」というのだと思います。

オルテガが述べた「エリート」と同様のことを、アルベール・カミュも『ペスト』の中で、登場人物のタルーが「紳士」という言葉を持ち出して、次のように述べています。

「みんな自分の中にペストを飼っている。誰一人、この世界の誰一人、ペストに罹っていないものはいない。だから、ちょっとした気のゆるみで、うっかりと他人の顔の前で息を吐いたり、病気をうつしたりしないように、間断なく自分を監視していなければならないのだ。自然なもの、それば病原菌だ。(…中略…)紳士とは、できるだけ誰にもペストをうつさない者、可能な限り緊張していら

る者のことだ。」

少しずつ暑くなってきて、マスクの着用は大変だと思います。しかし、マスクを着用しないことは、自分のことしか考えない「野蛮」な行為です。「きつと大丈夫」という根拠なき理論。「暑いから大変だ」という自己都合。

自分は誰かにコロナウイルスを感染させるかもしれない。そういう、緊張してられる人になってください。なぜって?

成長につながるからです。人は緊張しないと成長できません。学校は生徒が成長する場です。

自分はマスクを着用するのに、マスクを着用しない人はズルイじゃないかって?

そんなことを言っているようでは「紳士」になれません。

相称性を論じない。それが「紳士」の作法です。他人は関係ありません。

まずは自分がやってみる。ただ、それだけです。ちょっとしたことなんです。

そして、その「ちょっとしたこと」をしてみるだけで、自分の中の何かが変わります。それが成長です。

勉強も部活動も同じです。学校にも各教科・各競技の専門家がいます。

専門家の意見を聞いて、その物事に真摯に取り組んでみてください。立派な「紳士(大人)」になるために。